

令和6年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立羽咋高等学校

重点目標	具体的取り組み	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び今後の扱い(改善策等)	
1 確かな学力と個別最適な学びの推進 ICT機器の活用や授業形態の工夫、観点別評価等の活用により、生徒が主語の授業への改善を図る。	①	・観点別評価を活用した授業改善 ・生徒の主体的な活動を促す発問の工夫 ・学習到達度に応じた習熟度別指導の充実 ・ICTを活用した学習支援の充実	「授業では、主体的に取り組もうと思える問いかけや課題が提示されている」という項目に、「よくあてはまる」と答えた生徒の割合が、 A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	授業評価アンケートの結果は、全体で「よくあてはまる」と答えた生徒の割合は56%であった。 56% C	中間評価の段階で「生徒が主体的に活動する場面があり、思考力を高めることができる内容になっている」と答えた生徒の割合は55%であったが、今回はほぼ横ばいの結果であった。達成度をさらに高めるために、職員研修で学んだことを実践したり、異年齢・異教科の少人数グループでの互見授業を実施したりする。
	②	・日々の学習を自らの将来と結び付けて考えさせることを通してキャリア意識を育てる。 ・添削等の個別指導と、補習や学習会等の全体指導を組織的、計画的に行う。 ・生徒一人ひとりの進路希望やニーズに応じられる指導体制を構築する。	ア：難関10大学・国公立医学科合格者3名以上 イ：金沢大学合格者15名以上 ウ：国公立大学合格者80名以上 上記ア～ウのうち達成した項目が A 3項目 B 2項目 C 1項目 D なし	ア：難関10大学合格者 3名 イ：金沢大学合格者 18名 ウ：国公立大学合格者 87名 A	早期から丁寧な面談や集会を重ねて進路目標を明確にさせ、上位層に対しては、添削指導等の個別対策を継続的に行ったこと、また、中下位層に対しては、国公立大学を最後まで諦めさせない指導を粘り強く継続したことが功を奏した。今後も学校推薦型選抜や総合型選抜を含め、受験方法の検討とその対策(KUGSや小論文指導等)を講じていく必要がある。
	③	・学習支援アプリを活用した生徒自身による生活管理の推進 ・学習支援アプリを活用した生活実態の把握と個々の生徒へのフィードバック ・個別面談を通した現状と課題の把握	1・2年生それぞれで、平日の家庭学習時間3時間以上達成者の割合が、 A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	平日家庭学習時間3時間以上達成者の割合(第1回(4月)から第4回(11月)までの平均) 1年生 1.4% D 2年生 2.0% D	目標と結果が大きく乖離している。生徒の意識が変化している中でこれまでの手法が通用しなくなっており、目標の設定から抜本的に見直す必要がある。来年度に向けて、教員と生徒の双方が納得できる家庭学習のあり方について議論し、生徒が主体的に学習する仕掛けや家庭学習を促す授業への改善策を検討する。
学校関係者評価委員会の評価	生徒一人ひとりの進路希望やニーズに寄り添うため、大学の合格者数だけでなく、進路選択に対する生徒の満足度を測る指標の導入を検討していただきたい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方針	生徒の進路満足度を測るため主観的・客観的なデータを収集し、結果をもとに、指導方法の改善や進路支援の充実を図る。				

重点目標	具体的取り組み	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び今後の扱い(改善策等)	
2 豊かな心の涵養 生徒が主体的に運営する生徒会活動や部活動等を創出するなど、さまざまな活動を通じて生徒に達成感や自尊感情を育む。	①	・生徒による行事運営の推進 ・部長会議の定期開催 ・各委員会委員長会議の活性化	生徒会活動や部活動が主体的に取り組める場となっており、達成感や自尊感情が高められたと感じる生徒の割合が、 A 80%以上 B 65%以上 C 50%以上 D 50%未満	学校評価アンケートの結果は、全体で「よくあてはまる」、「おおむねあてはまる」と答えた生徒の割合は84.4%であった。 84.4% A	後期は生徒会主催で羽高祭(体育祭・文化祭)が行われたので、その取り組み方が高い評価につながった。特に各クラスで考えた企画への取り組みを中心に自身の努力や頑張りを感じ、最終的には達成感や満足感を得られる成果があったと思われる。今後は部長・委員長・クラス会長を集め会議を開催し、生徒会活動(お昼寝タイム・ボランティア等)への協力の依頼や意見の聞き取りを行い、より一層の充実を図る。
	②	・行事ごとの振り返り活動	学校評価アンケートにおいて、行事後の振り返り指導を生徒に対して実践している教員の割合が、 A 80%以上 B 75%以上 C 50%以上 D 50%未満	学校評価アンケートの結果は、全体で「よくあてはまる」、「おおむねあてはまる」と答えた教員の割合は97.0%であった。 97.0% A	行事後振り返りアンケートについて、義務的に実施するような雰囲気は減少しているように感じる。実施した後の声を聴き次の活動につなげたいという思いで実施するのが、アンケートの本来のあるべき姿である。今後も教員全員でこのことを共有し、ポジティブな姿勢で、各行事に取り組む、生徒の学校生活を充実させていく。
	③	・学習支援アプリの機能を活用した日常的な観察 ・スマホ・携帯の使用方法についての継続的な全体指導 ・いじめアンケートの実施	学校評価アンケートにおいて、ネットトラブルやいじめ問題の予防・対応・解決に向け、常に心掛け実践している教員の割合が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	学校評価アンケートの結果は、全体で「よくあてはまる」、「おおむねあてはまる」と答えた教員の割合は100%だった。 100% A	学校評価アンケートで「よくあてはまる」と答えた割合が27.3%だった。「おおむねあてはまる」を含めると100%にはなるが、ネットトラブルやいじめ問題については、教職員が見えない場面で起きていることが多く、問題があった時に重大事案に発展することがある。常に生徒の様子の変化に注意を配り、異変を感じたら即座に対応するよう心掛ける。今後も継続して生徒に関する情報を教員全員で共有する。
学校関係者評価委員会の評価	生徒の主体性を育む学校祭の改革は大変評価できる。今後は、生徒の主体性がどのように育まれているかを測る評価基準の策定についても検討をお願いしたい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方針	生徒の主体性の成長を可視化するため、計画・実行・振り返りの各段階で自己評価や相互評価を取り入れ、それをもとに具体的な評価基準を設け、成長の過程を記録する仕組みを整える。				

令和6年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立羽咋高等学校

重点目標	具体的取り組み	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び今後の扱い(改善策等)
3 課題発見力・解決力の育成 DXハイスクール指定校・STEAM教育指定校として、DX探究未来塾（総合的な探究の時間等）での活動を通して、地域社会の問題解決や改善に取り組む。	① ・プロジェクト型授業（PBL）の実施 ・教科横断的授業の実施 ・データサイエンス講座の実施 ・豊富な発表機会の設定	総合的な探究の時間（自己評価シート）のルーブリックにおいて、探究前のレベル平均より探究後のレベル平均が上昇している生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	総合的な探究の時間（自己評価シート）のルーブリックにおいて、探究前のレベル平均より探究後のレベル平均が上昇している生徒の割合は99.2%であった。 99.2% A	2年生自己評価シートのルーブリックにおいて、探究前のレベル平均2.04、中間発表後(11/2)2.83、最終選考会後(12/17)3.36であり、ほとんどの生徒が、調査力・分析力・思考力・判断力・表現力・主体性が伸びたと答えていた。夏に行ったフィールドワークや2学期以降複数回行った発表会の経験によって生徒の実感が高まったと考える。今後、コンテストへの応募や、進路指導につなげる取り組みを充実させていく。
学校関係者評価委員会の評価	ルーブリックを活用することで、生徒の自己評価が高まりやすくなる傾向がある。今後は、生徒の満足度など、別の視点を取り入れた指標の導入も検討していただきたい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策	ルーブリック評価に加え、生徒の学びの充実度や達成感を測るアンケートを定期的実施する。自己評価だけでなく、他者からのフィードバックも取り入れ、より多角的な評価を行う。			

重点目標	具体的取り組み	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び今後の扱い(改善策等)
4 教職員の多忙化改善 学年・分掌業務の平準化や業務の精選により時間外勤務の削減を図る。	① ・教員の業務の適切な配分 ・業務の重複や無駄の削減 ・ICTを活用した教員間での情報共有や連携の強化	教員の時間外勤務時間調査において、月平均の時間外勤務時間が A 35時間以下 B 35～40時間 C 40～45時間 D 45時間超	4～3月の平均は41.6時間であった。 41.6時間 C	4月から3月の平均では、前年と比べて2.7時間増加しており、ほとんどの月で前年を上回る結果となっている。この増加の主な要因として、全国大会等での生徒引率の増加や、コロナ禍の収束に伴う対外行事の増加が考えられる。次年度に向けて業務内容の見直しを進めるとともに、業務の適正な分担や役割の再設定を検討し、一部の教員への過度な負担を抑制する。
学校関係者評価委員会の評価	DXハイスクールの業務により教員の負担が増すことが予想されるなか、部活動の縮小や見直しについても検討すべき重要な課題である。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策	部活動の見直しについては、生徒や保護者の意見を聞きながら、教員の負担軽減策を段階的に進める。			